

エスキース

打打よ打

机の上のスケッチブックを払い落として、できたスペースに鏡を置く。スキンケアをし、日焼け止めを塗って、ベースメイクを仕上げる。アイラインを引きながら、はじめて化粧をしたときは楽しかったなあ、とぼんやり考えた。今ではただの作業だ。

私は物心ついたころから絵が好きだった。休み時間はずっと絵を描いていたし、美術の授業で描いた絵が賞を貰ったことだってある。小学生のころには絵の仕事をする決めていて、高校生までそれを疑わずに過ごしてきた。

そうして始まった美大生活は、非常につまらないものだった。一年時に受けられる授業はほとんど座学で、色の基本だとか、画材ごとの特徴だとかをひたすら覚えるようなものばかり。たまにある実習もデッサンをするだけで、オリジナリティと呼べるものは一切ない。入学して二か月経った頃には課題をなあなあに終わらせることを覚え、嫌々絵を描いては先生のダメ出しをかわすことばかりを考えるようになった。化粧と一緒にだな、と思った。私は何のために美大に入ったんだろう。絵を描き続けていた昔の私に背いて生きているような感覚が、ずっとあつ

た。

午後三時。身支度をそれなりに整え、ファミレスに向かう。今日は友達と久々に会う約束をしていたのだ。彼女は私と同じ鹿児島出身で、一緒に上京している。鹿児島と東京は距離こそあるものの、県内に整った教育機関がないという理由で東京進学は珍しくない。とはいえ長い付き合いの友人は大学生活では貴重だし、会えるのは素直に嬉しい。

「ナオ、久しぶり！ 待った？」

「……うん、待ってないよ。久しぶり」

声をかけられる。久々に会った友人リカは、髪をアッシュに染めてあか抜けた雰囲気をもっていた。高校までの彼女とは別人のように感じて、うまく言葉が出てこない。どぎまぎした気持ちを抱えたまま、ガストの扉を開く。ドアベルが鳴った。

「ハンバーグ……。うん、チーズハンバーグにする。そっちは？」

「ん……。ドリアとスパゲッティと……。ピザまでは絞り込めてる」

……優柔不断は悪いことではない。彼女は色んな事に興味が湧いてしまうだけなのだ。いつも決まったメニューしか食べない私よりよかったです。

「ねえ、どう、学校？ やっぱ楽しい？」

「うん。楽しいよ、すぐく」

あらかじめ考えていた通りに嘘をつく。リカは持ち前のコミュ力を生かし、有名私大に推薦入試で受かって、現在は経済学部で学んでいる。就職に有利だからという合理的な理由で進路選択をしたのだ。対して私は絵が好きというだけで美大に進み、多額の授業料を親と国に払わせている。今の私を、彼女に見られてくよくよ悩んでいる。今の私を、彼女に見られたくないと思った。私は嘘に重ねる言葉が見つからず、別の話題を必死に考える。

「……あ、トイレ行ってきたいい？　ここトイレどこだっけ」

話題探しをする私をよそに、友人はトイレに行った。私はボックス席に一人になって……助かった、という気になった。嘘をついたとき特有の焦燥感が残された私の身を苛む。私はいつもの癖で、紙ナプキンを引き出し、ボールペンを取り出して絵を描き始めた。

何を描こう。地元の友達と会ってるんだから、ご当地のゆるキャラにしようか。紙ナプキンは画材には向かず、線ががたつく。なるべく手元を安定させながら、豚のキャラクターを象った……。

「ねえ、上手いね」

背後からリカの声がして、ぱっと振り向く。いつ

の間にか戻っていた彼女は、神妙な顔をしていた。私が何も言わないでいると、リカは向かいの席に座り、語り始めた。

「ずっと誰よりも上手かったもんね。賞を取った絵だって、海の波が作る影まで描きこんでいて……。でも私はあれこれ言い訳をして、絵にちゃんとぶつかるってことができなかった。結局上達しないまま、逃げるみたいに今の大学を選んだ。後悔はしていないけれど……。ナオはやりたいことを貫いてて、すごく格好良いな、って思ってたんだよ」

そこまで言って、彼女は顔を上げた。いつもの明るい表情からは想像もつかない、気恥ずかしそうな顔だった。思えば高校生の頃、誰よりも早く合格を決めた時の彼女もこんな顔をしていた。当時の私は彼女が何もかもうまくやっていると思っていた。自分とは違う、上位の存在のように感じていた。しかしどうやら、それはお互い様だったようだ。

その後は互いの近況を話したような気がする。一人暮らしの話、東京という街の話、サークルの話……。料理は少しずつ減っていった。午後五時頃、店内に人が増えてきてお開きになった。帰りの総武線で、窓に映った自分と目が合う。もう一回、ちゃんと絵を描いてみよう。家に帰って、床に散らばった

スケッチブックを拾って、6Bの鉛筆で好きに書いてみよう。ポケットから一枚の紙ナプキンを取り出す。そこには、二人分の絵が輝いていた。